

チョコレートトキヤッスル  
2018年5月公演

腕切る少女じゃいられない

決定稿

## 人物

リホちゃん (18)

99.4.18 うまれ。パニック障害、パーソナリティ障害。新田先生のが好き。

新田先生 (24)

93.9.24 生まれ。心療内科。キホちゃんの幼馴染。リホちゃんの主治医。キホちゃんのが好き。

キホちゃん (24)

93.7.8 生まれ。リホちゃんの姉。

たつくん (24)

93.6.11 生まれ。キホちゃんの彼氏。

ダイキくん

リホちゃんの虚構世界に現れる、リホちゃんの「イマジナリーフレンド」。リホちゃんのアドバイザーとしての役目。

## ☆舞台美術

カラーボックス、ソファ、(回転する)椅子2脚、事務デスク。  
舞台奥に、キホちゃんとリホちゃんの服が何着かずつハンガーにかかっている。

壁掛けのコルクボードに、キホちゃんとリホちゃんの写真。

## ○開演

キホちゃん、やって来る。リホちゃんを探す。

キホちゃん 「リホ？ リホ？ あれ……。リホいないの？」

たつくん、やって来る。

たつくん 「どしたん」

キホちゃん 「たつくん」

たつくん 「キホ」

キホちゃん 「リホがいないの」

たつくん 「リホちゃんが？」

キホちゃん 「うん」

たつくん 「そんなはず」

たつくん、探す。

たつくん 「リホちゃん？ リホちゃん？」

キホちゃん 「リホ、リホ？」

たつくん 「リホちゃん？ あれ、あれ」

キホちゃん 「いないの、どこにも」

たつくん 「リホちゃん。リホちゃん」

たつくんとキホちゃん、顔を見合わせる。

たつくん 「いないねえ」

キホちゃん 「どこ行っちゃったんだろう」

たつくん 「ブラジルの人、聞こえますか？」

新田先生、やって来る。  
キホちゃん、気づいて

キホちゃん 「新田！」  
新田先生 「あ」

新田先生、キホちゃんとたつくんに気づいて

新田先生 「どうも（一礼）」  
たつくん 「どもつす（一礼）」  
キホちゃん 「新田、リホを探して」  
新田先生 「え？」  
たつくん 「見当たらないんですよ」  
新田先生 「リホちゃんが？」  
キホちゃん 「そう、そうなのよ」  
新田先生 「（神妙に頷いて）分かった。手伝うよ」  
キホちゃん 「ありがとう」

新田先生、探し出す。  
たつくんとリホちゃんも、再び探し出す。  
しばらくしてダイキくんがやって来る。誰も気づかない。

ダイキくん 「リホちゃん！」  
新田先生 「（止まって）え」  
キホちゃん 「（止まって）え」  
たつくん 「（止まって）え」

3人、再び動き出して、探すのを再開する。

ダイキくん 「リホちゃん！」  
新田先生 「（止まって）え」  
キホちゃん 「（止まって）え」  
たつくん 「（止まって）え」  
新田先生 「声が（集まる）」  
たつくん 「どこからか声が（集まる）」  
キホちゃん 「リホを呼ぶ声が（集まる）」

ダイキくん 「リホちゃん！」  
新田先生 「まただ」  
たつくん 「また聞こえる」  
キホちゃん 「声が」  
ダイキくん 「みんな呼んでるよ！」  
キホちゃん 「リホ（連呼）」  
たつくん 「リホちゃん（連呼）」  
新田先生 「リホちゃん（連呼）」  
ダイキくん 「リホちゃん！！」

M アーバンギャルド『u星より愛をこめて』

キホちゃん 「なにこれ」  
たつくん 「なんだ」  
新田先生 「これは」

3人、散り散りになる。  
リホちゃん、出てくる。  
S、サイレン

たつくん 「(リホちゃんに気付いて) あ！」  
キホちゃん 「あ！」  
新田先生 「あ！」  
3人 「リホちゃん！」

3人、集まる。

ダイキくん 「リホちゃん！ また、切っちゃったんだね」  
リホちゃん 「あなたは、だあれ」  
ダイキくん 「ぼくだよ、ぼく！」  
リホちゃん 「だあれ？」  
ダイキくん 「ぼくだよ、思い出せない？」  
リホちゃん 「ごめんなさい、分からない。カイトくん？」  
ダイキくん 「違うよ」  
リホちゃん 「え、ごめんなさい」  
ダイキくん 「謝らなくていいんだよ」

リホちゃん 「エミリちゃん？」  
ダイキくん 「エミリちゃんでもないよ」  
リホちゃん 「ごめんなさい」  
ダイキくん 「いいんだってば」  
リホちゃん 「でもリホ、ほかに思い出せないよ」  
ダイキくん 「リホちゃん。ぼくはね、ダイキっていうんだよ」  
リホちゃん 「ダイキくん？ 全然ピンと来ない……」  
ダイキくん 「会うのは、初めましてだもん」  
リホちゃん 「初めましてなの？」  
ダイキくん 「そうだよ」  
リホちゃん 「あ、じゃありホはここいらでお暇（します）」  
ダイキくん 「ちよつとちよつとちよつと、待って！」  
リホちゃん 「ええ」  
ダイキくん 「リホちゃん、どこ行くんだい」  
リホちゃん 「怪しい人の言うことは聞いちやだめって」  
ダイキくん 「怪しくないよ！ だいたいまだ会ったばかりで怪しいかどうか  
かなんて」  
リホちゃん 「あ、じゃありホはここいらでお暇（します）」  
ダイキくん 「ちよつとちよつとちよつと、待って！ 待って！」  
リホちゃん 「ごめんなさい。まだ何か」  
ダイキくん 「あるある、大ありだよ」  
リホちゃん 「ええ、なんですか」  
ダイキくん 「ぼくはね、きみと友達になりに来たんだよ」  
リホちゃん 「ともだちに？」  
ダイキくん 「そうだよ」  
リホちゃん 「リホと？」  
ダイキくん 「うん。リホちゃんと」  
リホちゃん 「どうして？ どうしてリホと友達になりたいの？」  
ダイキくん 「それはね。そういう運命だからさ！」  
リホちゃん 「うんめい？」  
ダイキくん 「そうだよ、運命！ よろしくね、リホちゃん！」  
リホちゃん 「うんめい！ なんかかっこいい！」  
ダイキくん 「さあ、踊るよ！」

踊り出す。

新田先生とリホちゃん以外、ハケる。

## ○新田先生の診察室 1

新田先生とリホちゃんが対座している。

リホちゃんはトートバッグを持っている。

新田先生のデスクの上にはお弁当箱とおんぼろマフラーが置かれている。

新田先生、リホちゃんの左腕を診ている。リストカットの痕。

新田先生 「だいぶ切ったねえ」

リホちゃん、頷く。

新田先生 「痛かったでしょう」

リホちゃん、頷く。

新田先生 「でも傷自体は深くないか」

リホちゃん 「……」

新田先生 「いつもの抗不安薬、出しておくれ」

リホちゃん 「……………」

新田先生、リホちゃんを見る。

新田先生 「どうしたの」

リホちゃん、何か言っている。

新田先生 「(聞き取れなくて) ん？」

リホちゃん 「(小声)」

新田先生 「？」

リホちゃん 「もっと強いのがいいです」

新田先生 「強いのが欲しい？」

リホちゃん、頷く。

新田先生、少し考え

新田先生

「うーん……、分かりました。もうちょっと長く効くやつ、出しておくね。(リホちゃんに背を向け、デスクに向かう)でもあんまり飲みすぎちゃ当然良くないし、どうしても切りたくなるのを止められなかったら、一回キホにも相談して、カッター全部片づけてもらったりした方がいいのかもしれないね。あとは、代わりの方法を試してみるとか。紙に思ってることをとにかく書いてみたり、氷を古傷の上に当てる……とかでも落ち着くことあるみたい。薬も、キホに預けて、飲む分だけその都度もらう、とか。飲みすぎないないように」

リホちゃんが新田先生の真後ろに立ち、耳元で

リホちゃん

「(囁き)先生」

新田先生

「うわっ！」

リホちゃん

「笑っている」

新田先生

「どうしたの」

リホちゃん

「(笑っている)」

新田先生

「リホちゃん？」

リホちゃん

「(小声)」

新田先生

「……え？」

リホちゃん

「(小声)」

新田先生

「……何？」

リホちゃん

「好きです」

新田先生

「え？」

リホちゃん

「好きです」

新田先生

「ええ？」

リホちゃん

「好きです！」

新田先生

「……………」

リホちゃん

「……………」

新田先生、少し考える。

リホちゃん、期待する目。

新田先生

「うん、ありがとう」

リホちゃん

「え!？」

新田先生

「じゃあ、レキソタン2週間分」



リホちゃん 「違います！」

新田先生 「え？（カルテを見て）ええと、今まで飲んでいたのがデパスだよね」

リホちゃん 「そうです。や、そうじゃなくて！」

新田先生 「ん？」

リホちゃん 「好きです、新田先生のこと！ どうして躲すんですか」

新田先生、またリホちゃんに背を向けて

新田先生 「ええと……好きっていうのは、医者として」

リホちゃん 「違います。異性としてです」

新田先生 「異性」

リホちゃん 「異性です」

新田先生 「異性として、ですか」

リホちゃん 「異性としてです。お付き合いしたい、の好きです」

新田先生 「突然そんな」

リホちゃん 「突然じゃないですよ」

新田先生 「え」

リホちゃん 「ずっとずっと前から好きでしたよ」

新田先生 「そうなの……？」

リホちゃん 「はい。なので今日は、わたしの思いを伝えようと思います」

リホちゃん、トートバッグからマフラーを取り出す。マフラーはラッピングされている。

新田先生 「マフラー！」

リホちゃん 「はい、まだ寒いし、先生のボロボロだから」

リホちゃん、渡す。

リホちゃん 「どうぞ」

新田先生 「（受け取って）ちょうど欲しかったんだよ、いいのかい？」

リホちゃん 「はい」

新田先生 「ありがとう！」

リホちゃん 「どういたしまして」

新田先生 「でも、どうして」

リホちゃん 「だから！」

新田先生、ハツとして「そうか！」みたいな顔。

新田先生 「あ、ありがとう！！（立ち上がる） とても、嬉しいです。ど、ど、どこで買ったの」

リホちゃん 「手編みです」

新田先生 「手編み！？」

リホちゃん 「はい」

新田先生 「す、すごい」

リホちゃん 「あ、あと、手紙を書いてきました」

新田先生 「ぼくに？」

リホちゃん 「はい」

リホちゃん、鞆の中を探す。

リホちゃん 「あれ、あれ……？ どこ行った？ ○枚目、●枚目……」

新田先生 「どうした。見つからない？」

リホちゃん 「あれ？ どれかなあ」

新田先生 「どれ？」

リホちゃん 「これじゃないしなあ」

新田先生 「ぼくも探そうか」

リホちゃん 「だめ！！」

リホちゃん、勢い余って鞆を落とす。  
鞆から大量の手紙が出てくる。

リホちゃん 「あ」

新田先生 「たくさんある」

リホちゃん 「いやだ！」

リホちゃん、慌てて拾い始める。  
新田先生も、慌てて拾おうとする。

リホちゃん 「先生はいいから！」

新田先生 「でも」

リホちゃん 「いいから」  
新田先生 「でも、たくさん。ぼくのために書いてくれたんだろ？ 全部」  
リホちゃん 「そういうのは察しがいんだから」

そうこう言いながら、拾い終わって

リホちゃん 「書いても書いても、いつも渡せない」  
新田先生 「どうして」  
リホちゃん 「恥ずかしいもん」  
新田先生 「そんな必要は」  
リホちゃん 「乙女の恥じらいは、先生にはまだ早いね！」  
新田先生 「乙女……」  
リホちゃん 「ああ。またタイミング失っちゃった」  
新田先生 「気にせず渡してよ」  
リホちゃん 「そう簡単に渡せたら、苦労しない！ 完璧に渡したいでしょ」  
新田先生 「ふうむ」  
リホちゃん 「今日で255枚溜まりました」  
新田先生 「そんなに!？」  
リホちゃん 「次渡せたら、256枚分の思い、籠ってますからね」  
新田先生 「気を引き締めておくよ」  
リホちゃん 「先生」  
新田先生 「ん？」  
リホちゃん 「あと、これです」  
新田先生 「これ？」

リホちゃん、リストカットの痕を見せる。

新田先生 「……………えと」  
リホちゃん 「先生への思い」  
新田先生 「え〜」  
リホちゃん 「好きの思い」  
新田先生 「どういう(こと?) ……」  
リホちゃん 「会えるじゃないですか、こうすれば」

新田先生、訳が分からない様子。  
リホちゃん、溜息。

リホちゃん 「手紙も、マフラーも、リストカットも、全部、先生に会いたいからですよ」

新田先生 「えと……」

リホちゃん 「先生のこと……好きだからですよ」

新田先生 「まじ……？」

リホちゃん、頷く。

リホちゃん 「好き、っていうの分かってもらえました？」

新田先生 「まじ……か」

リホちゃん 「まじですよ」

リホちゃん、新田先生に近づく。

新田先生、リホちゃんから離れる。

リホちゃん 「どうして離れるんですか」

新田先生 「いや、近づいて来るから」

リホちゃん、新田先生に近づく。

追いかけてこみたいになる。

リホちゃん、逆回り。

リホちゃん、クラウチングスタート。

リホちゃん 「どん！」

リホちゃんと新田が追いかっこ。

リホちゃん 「(追いながら) 先生、わたし、本当に好きなんですよ」

新田先生 「(追われながら) ……」

リホちゃん 「先生はわたしのこと、どう思ってますか」

新田先生 「…… (困った顔)」

リホちゃん 「わたしこれでも、相当勇気出してるんですよ、なんで無視するの」

新田先生 「いや……、その」

リホちゃん 「わたしと」

リホちゃん、新田先生を捕まえる。

リホちゃん 「付き合つてよ……!!」  
新田先生 「……いや、だって、ぼくには」

リホちゃん、新田先生にハグ。

新田先生 「!」

リホちゃん 「知ってますよ」

新田先生 「……だよね」

リホちゃん 「先生、ほら、腕の傷（見せる）」

新田先生 「……」

リホちゃん 「痛かったんだよ」

新田先生 「……」

リホちゃん 「でも先生に会えると思って」

新田先生 「こんなことしなくても会える（じゃないか）」

リホちゃん 「でも伝わらない。真剣なこと」

新田先生、リホちゃんを見る。しばし目が合う二人。

リホちゃん 「心臓の音、伝わる？ 早くなってる」

リホちゃん、新田先生の手を胸に押し付ける。

リホちゃん 「ドクンドクンドクンドクン……（だんだん速くなる）」

新田先生 「分からないよ」

リホちゃん 「意地悪。すぐく……わたし緊張してるのに」

新田先生 「ねえ、リホちゃん。こんなことされ（ても、ぼくは）」

リホちゃん 「（遮つて）好き……!! 先生、好きです」

新田先生 「きみが僕を好いてくれるのはありがたいし、嬉しい」

リホちゃん 「なら」

新田先生 「でも、そもそもぼくとリホちゃんは、医者と患者じゃないか」

リホちゃん 「そうだよ、そうだよ。医者と患者」

新田先生 「だから、ぼくはリホちゃんを好きになることはできない」

リホちゃん 「なんで？ どうして？」

新田先生 「本当の恋じゃないかもしれないからさ」

と、そこに病院の女性スタッフが入って来る。

女性S声 「ちよつと先生、よろしいでしょうか……」

新田先生 「すぐ行きます」

新田先生、リホちゃんを離し

新田先生 「ぼくらは、診察のこと以外は何も話していない。何も聞いていない、いいね？ マフラー、ありがとう」

新田先生、ハケる。

リホちゃん、一人取り残される。

リホちゃん 「あゝあ。あゝあ。はあゝつらい。何も話していない……何も聞いていない……本当の恋じゃない。だから、ぼくはリホちゃんを好きになることはできない。けっこう、頑張ったんだけどなあ。あゝつらい。つらい」

リホちゃん、ポケットからカッターを取り出す。

リホちゃん 「リスカしますか……ふふ、韻踏んじやった。あゝその前に……」

リホちゃん、スマホを取り出す。

リホちゃん 「自撮りしよ……」

リホちゃん、自撮りを始める。

リホちゃん 「ぶっさ。全然盛れない。はゝもうだめだな、生きてる価値ないな」

リホちゃん、スマホをしまつてリストカット。

リホちゃん 「うーうーうーうーうーうーうーうーうーわあああああ」

●リストカット1

M、アーバンギャルド『u星より愛をこめて』  
L、変化する。

リホちゃんコール。

ダイキくん、キホちゃん、たつくん、新田先生、出てくる。  
踊りだす。

リホちゃん 「あああああ！！ 痛い！ 痛い！ ああああああああ！！  
血が！ 血が出てくる！ 赤い、赤い…… 血が…… 血がああ  
あああああ気持ちいいいいいいいいいい」

リホちゃんも踊りだす。

キホちゃん、たつくん、新田先生、ハケていく。  
ダイキくんとリホちゃんが残る。

●ダイキくんの世界1

リホちゃんは躁の反動で猛烈に倦怠している。  
リホちゃん、寝転がっている。  
ダイキくん、遠くからそつとリホちゃんの様子を見ている。

リホちゃん 「(上を見つめながら) ああ……… ああ……… 無、だ。(寝  
返りを打って) うう……… うう……… いやだ……… (寝  
返りを打って) なんで、なんで……… ああ死にたい………」

リホちゃん、ふと自分の腕を見ると、赤い。

リホちゃん 「……わ！ ……またこんなに……。 ああ……… ああ………」

ダイキくん、リホちゃんに近づく。

ダイキくん 「また切ったねえ」

リホちゃん、寝たままダイキくんの方を見る。

リホちゃん 「……うん。っぼいね」  
ダイキくん 「覚えてないか」  
リホちゃん 「ラリってたからね」  
ダイキくん 「ODしたの？」  
リホちゃん 「うん」  
ダイキくん 「いつ」  
リホちゃん 「病院行く前……かな」  
ダイキくん 「新田先生ンとこ？」  
リホちゃん 「あん」  
ダイキくん 「え、ラリって病院行ったの？」  
リホちゃん 「や、行くときはラリってないよ」  
ダイキくん 「行くときは、って……」  
リホちゃん 「告ったことは覚えてる」  
ダイキくん 「うん、うん。………告った!？」  
リホちゃん 「告ったよ。だからその前に薬飲んだんじゃん」  
ダイキくん 「ドユクト」  
リホちゃん 「素面でなんか、告れないじゃんか？」  
ダイキくん 「酒みたいにデパスを使うな!」  
リホちゃん 「無理だよ、告白、え、告白??? 無理無理無理」  
ダイキくん 「で、どうだったの」  
リホちゃん 「それ聞いちゃうの」

間

リホちゃん 「(立ち上がって)ダメだった。え、なに? 何よ。いいから、ね  
えわたしの話聞いてよお!」  
ダイキくん 「何にも言っていないよ!」  
リホちゃん 「聞いてよお」  
ダイキくん 「聞いているじゃんずっと!」  
リホちゃん 「ダメだったの」  
ダイキくん 「それさつき聞いたよ! こわっ」  
リホちゃん 「なかったことにされた」  
ダイキくん 「なかったこと?」  
リホちゃん 「うん。『ぼくは何も聞いてない、きみは何も話してない』って」



ダイキくん 「ぼつちり覚えてるじゃん、ラリってた割には」

リホちゃん 「ここまでは素面、ここまでは素面なの」

ダイキくん 「だからそれ素面の意味合ってる？」

リホちゃん 「わたし、本当に一生懸命告白したんだよ！」

ダイキくん 「会話の……キャッチボールが……」

リホちゃん 「したくないけど、真心伝えようと思って、誠心誠意純真無垢に、あなたのことが好きなんです……！ って」

ダイキくん 「でも、ダメだったんだ」

リホちゃん 「うん。え、なんで？ なんで？ なんでかなあ？」

ダイキくん 「え？ それ聞く？」

リホちゃん 「ダイキくんなら、何かわかるでしょ？ ね、ね、ねえ」

ダイキくん 「そんなの……（腕を見る）」

リホちゃん 「え？ なに？」

ダイキくん、リホちゃんの無言で腕を見る。

リホちゃん 「え？ なになに？ ……言ってくれなきゃ分かんないよ」

ダイキくん、リホちゃんの腕を無言で見る。

リホちゃん、ダイキくんの視線の先に自分の腕があることに気が付く。

ダイキくん 「だから」

リホちゃん 「わたし、どこがダメかなあ」

ダイキくん 「そんなの」

リホちゃん 「わたしの何がいけないのかなあ」

リホちゃん、腕を後ろに引っ込めていく。

ダイキくん 「それ絶対分かってるよね！？」

リホちゃん 「え？ 分かんない分かんない！ 言ってくれなきゃ！（腕を隠しながら）」

ダイキくん 「それそれ（後ろに隠した腕を指して）」

リホちゃん 「え？ え？」

ダイキくん 「いや、その、隠してる……」

リホちゃん 「真っ赤な血液は愛の証！ 切りたてフレッシュ キュアリホちゃん！（決めポーズ）」





キホちゃん 「リホいないみたい」

たつくん 「(顔だけのぞかせて) でじま!？」

キホちゃん 「え、うん、なに」

たつくん 「別に」

キホちゃん 「ま、座つててよ。飲み物でも持って来るから。なにがいい？」

キホちゃん、上着を脱いでハケる。

たつくんも上着を脱いで、ソファに腰かける。

たつくん 「あ、あざーす。じゃあ、コーラ」

キホ声 「オッケー」

たつくん 「あざーす」

キホ声 「ちよつと待ってて」

たつくん 「おうおう」

キホちゃん、ハケる。

たつくん、部屋を物色する。

S、トポトポトポ

キホちゃん、飲み物(麦茶のボトル)を持って戻って来る。

キホちゃん 「お待たせ〜」

たつくん、ソファに座る。

キホちゃん、たつくんの隣に座る。

たつくん 「お、サンキュサンキュ。あれ」

キホちゃん 「いや、コーラじゃなくて、麦茶」

たつくん 「だな」

キホちゃん 「なかつたから」

たつくん 「まじか」

キホちゃん 「めんご横槍メンゴ」

たつくん 「ええよ、麦茶好きだし」

たつくん、飲む。

たつくん、噎せる。

キホちゃん、笑ってる。

たつくん 「コーラじゃん!!」

キホちゃん、笑ってる。

たつくん 「なに、え、どゆこと」

キホちゃん 「いや、コーラだよ」

たつくん 「コーラだねえ。コーラじゃんこれ。シュワシュワじゃん」

キホちゃん、急に笑うのをやめて

キホちゃん 「え、なに? なに? 怒ってるん??」

たつくん 「どういう情緒!」

キホちゃん 「たっ・くん♡♡」

キホちゃん、たつくんに抱き着く。

たつくん 「どういう情緒!? コーラコーラ!! (零れそうで危ない) 危ない危ない」

たつくん、コーラの入っているカップを置く。

キホちゃん 「たつくん♡♡ (イチヤイチャ)」

たつくん 「(ちよつと恥ずかしい) ええ〜〜」

キホちゃん、たつくんを見つめる。

たつくん 「……なんだよ」

キホちゃん 「ん? んふふふふ」

たつくん 「ああん?」

キホちゃん 「リホ、いないよ」

たつくん 「(唐突の誘いに) マジ!?!」

キホちゃん 「いないよ」

たつくん 「早くない!? まだ家着いて1分くらいしか経ってないけど」

キホちゃん 「だってええ〜 (じゃれつく)」

たつくん 「してなかったもんな、最近」

キホちゃん、頷く。

たつくん、ちよつと困ったような顔をして、キョロキョロ。

キホちゃん 「ねえ」

たつくん、(なに?) という感じでキホちゃんを見つめる。

キホちゃん 「撫でて」

キホちゃん、たつくんの手を掴み自分の頭の上に乗せる。

たつくん、少し困惑しながらも撫でる。

たつくん 「(撫でながら) どうしたんだよ」

キホちゃん 「……………」

たつくん 「？」

キホちゃん 「心が入ってな〜い」

たつくん 「えええ？ そう？」

キホちゃん 「なにい？ なんかあるの？」

たつくん 「なに、ないよ、なにも」

キホちゃん 「ふ〜ん」

たつくん 「…………よし。しよーぜ」

キホちゃん 「！」

たつくん 「してください」

キホちゃん 「ほおお」

たつくん 「しましよう」

キホちゃん 「まだまだ」

たつくん 「したいんです」

キホちゃん 「もう一声」

たつくん 「するぞ！！」

キホちゃん 「おおおお！！ よっしや！」

たつくん 「よっしや！！」

キホちゃん、立ち上がる。

たつくん 「うほおおおおおお！！」



たつくん、リホちゃんの服から顔を離す。  
たつくん、コーラ（麦茶のボトル）を飲んで

たつくん 「……行くぞおら！」

たつくん、ハケる。

S、シャワーの音、止まる。

キホ声 「Get to the bed!」

たつくん声 「ウス」

キホ声 「Let's begin!」

たつくん声 「ウス」

間

キホ声 「あ（喘ぐ）」

たつくん声 「（喘ぐ）」

たつくん声 「いい？」

キホ声 「いいよ」

キホ声 「いった？」

たつくん声 「うん」

S、軋み

リホちゃん、出てくる（鞆を持っている）。

リホちゃん 「ただいま〜」

リホちゃん、たつくんとキホちゃんの声にびっくりする。

リホちゃん 「え、うそうそうそ」

リホちゃん、いったんハケる。

リホ声 「え、うそうそうそ」



リホちゃん、戻って来て

リホちゃん 「いやいやいや、なんでわたしが遠慮しないといけないのよ」

リホちゃん、溜息。

リホちゃん 「サイアクっ」

リホちゃん、ソファに座り、鞆からヘッドフォンを出して装着する。

リホちゃん、マンガを読み始める。

キホちゃんとたつくんの喘ぎ声、終わる。

キホちゃん、乱れた服装で出てくる。リホちゃんを見

キホちゃん 「リホ!？」

リホちゃん 「……ただいま」

キホちゃん 「え、いつ帰ってたの」

リホちゃん 「なにが」

キホちゃん 「何がじゃなくて、いつ帰ったの。それ。外しなよ」

リホちゃん 「(ヘッドフォンを外して) さっき」

キホちゃん 「さっきって」

リホちゃん 「さっきはさっきだよ」

キホちゃん 「……聞こえた?」

リホちゃん 「……何が」

キホちゃん 「いや、べつに聞いてないなら」

リホちゃん 「何にも聞こえてないよ。音楽聞いてたんだから」

キホちゃん 「うそつけ! コードどこにも差さってない!」

たつくん声 「おっ、いい、キホ」

たつくん、上裸にTシャツを持って出てくる。リホちゃんがいる。

たつくん 「! 違う!」

たつくん、ハケに引っ込みシャツを急いで着て、戻ってくる。

リホちゃん 「もう!! わたしの努力を二人して! サイアクっ!」

リホちゃん、キホちゃんを睨む。

キホちゃん 「ごめん……」

たつくん 「恥ずかしい」

リホちゃん 「あゝあゝ 喉が渴いたなあ」

キホちゃん 「え？」

リホちゃん 「あゝあゝ 喉が渴いたなあ!!」

キホちゃん 「(察して) 持って来る」

キホちゃん、ハケる。

リホちゃん 「あゝあゝ コーラが飲みたいなあ」

キホ声 「あ」

キホちゃん、出てきて、反対側のハケへ。

キホちゃん 「すぐを買ってきます!」

リホちゃん 「え、あ、ちよつと!」

たつくん 「行っちゃいました」

リホちゃん 「そこまでしなくても良かったんだけどなあ」

たつくん、コーラ(麦茶のボトル)を差し出して

たつくん 「あ、実はこれコーラ」

リホちゃん 「……(無視)」

リホちゃん、マンガ読みを再開。

たつくん、リホちゃんのことをちらほら見る。

リホちゃん、その視線が気になる。

リホちゃん 「あ、ごめんなさい。わたし、邪魔ですよね。部屋、行きますか

ら、どうぞごゆっくり」

たつくん 「え、あああ、いや。いなよ」

リホちゃん、パーカーが落ちていることに気が付く。

リホちゃん、パーカーを手を取って

リホちゃん 「ん？」

リホちゃん、パーカーの匂いを嗅ぐ。

たつくん 「え、あ、ああ。なんかあ匂う匂う？」

リホちゃん 「なんか、このパーカー……」

たつくん 「……」

リホちゃん、鼻をクンクンさせながらたつくんの方へ。

たつくん、ちよつと離れる。

リホちゃん、クンクンしながらたつくんの方へ。

たつくん 「そうだ!!! リホちゃん!!!」

リホちゃん 「? はい」

たつくん 「伝えたいことがあるんだけど!!!」

リホちゃん 「? わたしに？」

たつくん 「YES」

リホちゃん 「……………」

たつくん 「あ、その前に、その匂いおれです」

リホちゃん 「!」

リホちゃん、パーカーを振り落とす。

リホちゃん 「ちよ、え、えええ?? はい??」

たつくん 「抑えきれなくて」

リホちゃん 「は?? えと、ごめんなさい、意味が」

たつくん 「あのさ、ジョークじゃなくてマジなんだけど」

リホちゃん 「意味が本当に」

たつくん 「好き」

リホちゃん 「は……………??」

たつくん 「好きだよ。I like you (手話)。うん」

リホちゃん、声も出ずにペタン、となる。

たつくん 「いや、違うな。I Love you (手話) か」

リホちゃん、ペタンとなったまま後ずさる。

たつくん 「いや、ありきたりすぎる。そんなんじゃないなくてもっと一歩上な、

ああ、I'm proud of you うん、これだ。I'm proud of you」

たつくん、しゃがむ。

リホちゃん、首を横に振っている。

たつくん 「I'm proud of you (手話)」

リホちゃん 「おええええええ」

たつくん 「ええええええ」

リホちゃん 「なに、は、え、なにプラウドって！」

たつくん 「え、知らない？」

リホちゃん 「し、知らないよ！ でも気持ち悪いのは分かる」

たつくん 「誇りに思うだよ、proud」

リホちゃん 「オロロロロロロ」

たつくん 「大丈夫？！ (リホちゃんに近づく)」

リホちゃん 「(下がって) いやー！」

たつくん 「ええ」

リホちゃん 「え、冗談ですよね？」

たつくん 「？」

リホちゃん 「たつくんが、え？ わたしのこと??？ す、す、誇りに思う？」

たつくん 「YES」

リホちゃん 「冗談はよろしでしょうよ」

たつくん 「冗談じゃないんだって」

リホちゃん 「へ？ え、いや、ん？ ん？ ん？ あ、ああ、あああ！」

たつくん 「理解した？」

リホちゃん 「いや、まったく！」

たつくん 「それは困った」

リホちゃん 「だって！！ お姉ちゃん！！ 彼女！ 彼女いる人！ ほかの

人に好き言わない！」

たつくん 「あー、いや、まあ、そう、そうなのかもしれないけど」

リホちゃん 「そうです、そうなんです！ そういふもんでしょ！」

たつくん 「でもおれは、キホよりリホちゃんのこと好きになっちゃったか

らさ!？ そんなこと言われても困るよ!？ え???？」

「逆ギレ!？」

リホちゃん たつくん 「キレてないっすよ! (長州小力)」

リホちゃん たつくん 「もう意味が、いや意図が分からない」

リホちゃん たつくん 「意味も意図も単純明快」

リホちゃん たつくん 「へ??? や、だって、お姉ちゃんと付き合ってるじゃん」

リホちゃん たつくん 「そうな」

リホちゃん たつくん 「好きじゃないの??」

リホちゃん たつくん 「うーっーん」

リホちゃん たつくん 「ええええええ!」

リホちゃん たつくん 「ええええええ!」

リホちゃん たつくん 「なんで付き合ってるの」

リホちゃん たつくん 「好きだから」

リホちゃん たつくん 「ドユコト!？」

リホちゃん たつくん 「リホちゃんのこと好きになっちゃったんだから仕方なくね」

リホちゃん たつくん 「わたしのどこをお!？ どこを好きになっちゃったんですかい」

リホちゃん たつくん 「KAO」

リホちゃん たつくん 「KAO!」

リホちゃん たつくん 「が、まず第一に好きで、で、可愛いなあ、と思つて見てたら、

なんか色々好きになっちゃった」

リホちゃん たつくん 「色々って……」

リホちゃん たつくん 「(リホちゃんに詰め寄って)なあ、リホちゃん」

リホちゃん たつくん 「(離れて)ちよ、ちよ、ちよ、来ないでください!」

リホちゃん たつくん 「好きだよ、好き(近づく)」

リホちゃん たつくん 「無理、無理です(離れる)」

リホちゃん たつくん 「おれと、付き合ってくれないか(近づく)」

リホちゃん たつくん 「バカじゃないの!？ え、さっきのさっきまでお姉ちゃんとや

リホちゃん たつくん 「つてたじゃん!!」

リホちゃん たつくん 「それとこれとは別だろ」

リホちゃん たつくん 「はああああ??？ 頭おかしい!」

リホちゃん たつくん 「そんなこと言われても仕方ないだろ、好きなもんは好きなんだ

よ」

リホちゃん たつくん 「ええええええ!!!」

リホちゃん たつくん 「わかった。キホとは別ればいいんだろ!」

キホ、コーラを持って戻って来る。

リホちゃん 「ひええええええええ」  
キホちゃん 「ただいまー！ コーラ……」

リホちゃんに詰め寄るたつくん。

キホちゃん 「え」

キホちゃん、コーラを落とす。

リホちゃん 「おねえちゃああああああん！！」

し、暗転

○リホちゃんとキホちゃんの家2・1

し、明転

新田先生がソファに座っている。

キホちゃん 「で、リホはどう……？ 良くなってる」

間

新田先生 「ちよつとずつ良くなっているんじゃないかな」

キホちゃん 「なあに、煮え切らない」

新田先生 「良い悪いなんて一言で言えるようなことでもないからなあ」

キホちゃん 「そんなもん？」

新田先生 「キホ」

キホちゃん 「ん？」

新田先生 「リホちゃんは今、変わろうとしている」

キホちゃん 「え……？」

新田先生 「良くなるうと、本当に思っていると思うんだ」

キホちゃん 「なに、何か言われたの？」

新田先生 「本当に今の状況が苦しいって、良くなりたいてって」

キホちゃん 「うん」

新田先生 「だから、新しい治療を勧めたんだ」

キホちゃん

「なに、怖いやつ？」

新田先生

「どんなのを想像してるんだ」

キホちゃん

「頭に電極ぶっ差したり、体に電気ショックを流したり」

新田先生

「ぶっ差さないし、流さないよ」

キホちゃん

「なんだ」

新田先生

「なんだって」

キホちゃん

「薬が増えたの？」

新田先生

「(首を横に振って)薬物療法だけだと、もう頭打ちだと思って、

ノートに書くように言ったよ」

キホちゃん

「はあ?? ノートに書く」

新田先生

「まあ、だから、協力してあげて欲しいんだよ」

キホちゃん

「どうやって」

新田先生

「大袈裟なこととはしなくていいと思うんだ。辛そうにしてたら、気にかけてあげるくらいで……ああ、もちろん今までもそうしてきているだろうから、そういう意味ではなくて。つまりその、リホちゃんは良くなるうとしていていると思っっている、ということを知っておいてほしかったんだ」

キホちゃん

「新田って」

新田先生

「？」

キホちゃん

「優しいね」

新田先生

「そんなことない」

キホちゃん

「そんなことないよ」

新田先生

「……そう」

キホちゃん

「分かった。リホのこと、わたしも気にしておく」

新田先生

「ありがとう、よろしく」

キホちゃん

「じゃあさ、わたしの話も聞いてよ」

新田先生

「？」

キホちゃん

「わたしも悩んでるの」

新田先生

「そうなの？」

キホちゃん

「何かいいアドバイスしてよ、心理学の先生」

新田先生

「ぼくは占い師じゃないぞ」

キホちゃん

「細かいことはいいからいいから」

新田先生

「細かくない」

キホちゃん

「彼氏が、妹に告ってたんだけど」

間

キホちゃん 「あ、これもう本題入ってるよ」

新田先生 「マジか。単刀直入だな」

キホちゃん 「それがわたしの良いところでしょ」

新田先生 「まあ。うん。彼氏が妹に告った!？」

キホちゃん 「おお、ワンテンポ遅いな」

新田先生 「彼氏が妹に告った!？」

キホちゃん 「重ねてきた」

新田先生 「これが重ねずにいられるか」

キホちゃん 「ミルフィーユだ」

新田先生 「どうして告ったんだ。キホと付き合っているんだろう？」

キホちゃん 「それが分かれば悩んでないわ!」

新田先生 「そういうもんなか」

キホちゃん 「そういうもんだ」

新田先生 「浮気……というやつか! 今流行りの!」

キホちゃん 「悩んでいるのは、たっくんのことじゃない」

新田先生 「え」

キホちゃん 「やつはどうでもいい」

新田先生 「じゃあいったい何を悩んでいると(いうんだ)」

キホちゃん 「リホをね、泣かせちゃったの」

新田先生 「リホちゃんを泣かせた?? キホが？」

キホちゃん 「うむ」

新田先生 「ん? なんで? リホちゃんが何か悪いことをしたの？」

キホちゃん 「リホを怒った」

新田先生 「怒った? なんで？」

キホちゃん 「それがねえ……今にして思えば、なんで怒っちゃったのか、本当に分からないんだよ。気が動転してたって言うのかな。なんか、目の前でたっくんがリホのことを押し倒していて、それがあまりにも不可解な出来事のように思えて、リホがたっくんを誘惑したに違いない、って思っちゃったんだと思うんだよねえ……。リホがそんな器用なことできるわけがないのに。なんでかそのときは『たっくんはわたしのこと好きなんだから、妹になんか目移りするわけない!』って思っちゃって」

新田先生 「坂道を下っているとき、スピードを出しすぎていることに気が付いた」

キホちゃん 「は??？」



新田先生 「スピードを出しすぎているんだ。坂道を下っているときに、このままでは崖下に落ちてしまう」

キホちゃん 「あれれ、わたしの話に飽きちゃったのかな？」

新田先生 「まあ聞いて。スピードを出しすぎているんだ、坂道を」

キホちゃん 「坂道を下っているときに、それはヤバいね」

新田先生 「そうだ、ヤバいんだ」

キホちゃん 「ヤバいやばい」

新田先生 「(立ち上がって) 目の前にはカーブが迫っている。このまま突っ込めば崖下に転落だ!! ヤバいやばいやばい!!!」

新田先生、キホちゃんを目で見る。

キホちゃん 「え? なに!」

新田先生 「ヤバいやばいやばい!」

キホちゃん 「なにになになに??」

新田先生 「ヤバいやばいやばい!」

新田先生、目で、立つように促す。左に立つ(運転手)。

新田先生 「ヤバいやばいやばい!!!」

キホちゃん 「ヤバいやばいやばい!!! どうしよう!!! 落ちそう!」

新田先生 「そうだ。そんなとき、きみはどうする?」

キホちゃん 「寝る。グー」

新田先生 「0点だ」

キホちゃん 「うくん」

新田先生 「出しすぎたスピード、傾斜の着いた下り坂、目の前には崖!」

キホちゃん 「うくん。そうだなあ。ブレーキを踏みこみ、ハンドルを……先  
生」

新田先生 「なんででしょう」

キホちゃん 「右ハンドルでしょうか、左ハンドルでしょうか!」

新田先生 「……ふむ、いい質問だ。トヨタはエスティマ、国産車。右ハンドルだ。交代」

新田先生、交代しようとする。

キホちゃん、交代を譲らず



新田先生 「で?!」

キホちゃん 「で???」

新田先生 「え?」

キホちゃん 「え??」

新田先生 「え??」

キホちゃん 「え??」

新田先生 「え??」

キホちゃん 「え?」

新田先生 「だから、キホが、リホちゃんを責めてしまったことは、仕方のないことなんだ……と考えることもできる。とんでもない非常事態だったんだから」

キホちゃん 「……なるほど。なるほど、なるほど。非常事態になると、より簡単なことしかできなくなる、というのが人間の性質だから、『リホがたつくんを誘惑した』と『たつくんが勝手にリホを好きになった』の二つを比べたとき」

新田・キホ 「より現実的に想像しやすい方を選んでしまった」

キホちゃん 「ということか」

新田先生 「ああ。というより、想像したくない方を意識的に排除した、と言えるかもだけど」

キホちゃん 「ハモったのなんだったんだ」

新田先生 「なんだったんだらう。」

キホちゃん 「まあなんだ、だから、つまり、あまりくよくよしすぎない方が」

新田先生 「それでも、わたしがリホを責めた、という事実是不変ならない」

キホちゃん 「それはそうかもしれないけど」

新田先生 「わたしがリホを傷つけた事実是不変ならない」

キホちゃん 「……」

新田先生 「わたしはリホを責めた。だから、リホは、苦しくなって……。またリストカットをしてさ、新田のところに行ったんだよ」

キホちゃん 「キホ……」

新田先生 「苦しくなって、でも苦しくなる自分が嫌で……新田のところに行つて、新田に助けを求めているんだよ」

キホちゃん 「……」

新田先生 「……」

キホちゃん 「わたしのせいだよ、わたしのせい……リホが苦しんでいるのは」

たつくん、リホちゃん、やって来てソファに座る。

たつくん、キホちゃんにコーラを渡す。



リホちゃん 「(泣きながら) おおい」

キホちゃん 「ああ？」

リホちゃん 「(泣きながら) ういじゃあい。おおいなお」

キホちゃん 「はあああ??」

リホちゃん 「好きじゃない、誇りなの！」

キホちゃん 「じゃかあしいボケ!!!!」

リホちゃん、激しく泣く。

キホちゃん 「うるさーい!!! 泣くな!!!!」

リホちゃん、急に泣き止む。

キホちゃん 「!？」

リホちゃん 「ああ、泣いた」

キホちゃん 「何この子、こわ」

リホちゃん 「ああ、意味わからないです」

キホちゃん 「はあ？」

リホちゃん 「意味わからないです」

キホちゃん 「なに」

リホちゃん 「なんでこれ、わたしが怒られるの」

キホちゃん 「怒るよ！」

「なんでえ?！ わたし何もしてないし、怒るならたつくんに怒つてよ！」

キホちゃん 「あのバカはもう知らない!!」

リホちゃん 「うそだ！ 大好きだったじゃん！」

キホちゃん 「いつの話よ！」

リホちゃん 「ついさっきだよ！」

キホちゃん 「わたしがいない間になに(してたのよ!)」

リホちゃん 「わたしがいない間にナニしてたくせに！」

キホちゃん 「それは別にいでしょ！」

「いいよ別に！ いいから、たつくんに怒ってよ！ わたしに怒るの意味不だし理不尽だよお。だいたい告って来たのたつくんのほうなんだから」

キホちゃん 「そう、それ、そこ」

リホちゃん 「……ええ? なに？」

キホちゃん 「あいつがあんたに告ったんでしょ？」

リホちゃん 「うん」

キホちゃん 「つてことは、あいつがあんたのこと好きで好きでたまらなくなつちやっただんでしょ？」

リホちゃん 「(不本意そうに) うん……たぶん」

キホちゃん 「じゃああんたが何かしたんでしょ！」

リホちゃん 「!????」

キホちゃん 「何かしないでそんなに好かれるわけないじゃん」

リホちゃん 「え、え? え??」

キホちゃん 「あんたがたっくんになんかしなきゃ、そんなに好かれるわけないでしょ?? だってわたしと付き合ってるんだもん。どうせなんかしたんじゃないの?? 色仕掛け? みたいなさ。違う? したんじゃないの? 誘惑的なさ」

リホちゃん 「ちよつと、お姉ちゃん、それ本気で言ってるの?」

キホちゃん 「思ってるから言ってるんじゃない」

リホちゃん 「本気でわたしが、たっくんのことを誘惑した、と思ってるの……?」

キホちゃん 「そうだよ」

リホちゃん 「本気で、わたしがたっくんにか何か好かれるようなことをしたって思ってる(??)」

キホちゃん 「そうだって言ってるんだろ！」

リホちゃん 「(キホちゃんの剣幕にたじろいで) ……お姉ちゃん?」

キホちゃん 「じゃなきゃおかしいじゃんか!! 好きだったんだよ、たっくんはわたしのこと!! 好きだったんだよ! なのに、なんで? ねえなんでよ、たっくんにか何したのよ」

リホちゃん 「お姉ちゃん……?」

キホちゃん 「何したのよ!! ねえ、返してよ、返してよたっくん。わたしのたっくん、返してよ!!」

キホちゃん、リホちゃんを突き飛ばす。

リホちゃん 「うっわあ」

キホちゃん 「ううううう(泣いている)。好きだったのに、好きだったのに。ねえ、なんで、なんでなのよ!!」

キホちゃん、号泣。

リホちゃんも、号泣。

キホちゃん 「ごめん、ちよつと頭冷やしてくる」

キホちゃん、ハケる。

リホちゃん、泣きながらカッターを取り出す。

●【回想】リストカット2

リホちゃん 「ううう……ううう……わたしは何もやってないのに。ホントになんにもしてないのに……なんで、なんで信じてくれないの。なんでわたしのせいなの……ううう」

リホちゃん、リストカット。

M、アーバンギャルド『u星より愛をこめて』

ダイキくん、新田先生、キホちゃん、たつくん、出てくる。

リホちゃん 「あ、あああああ、気持ちいい……あああ、あああああ、痛い、痛い……気持ちいい……気持ちいいよお……あああああああああ  
ああ……！」

ダイキくん、新田先生、キホちゃん、たつくん、踊りだす。

キホちゃん、たつくん、新田先生、ハケていく。

ダイキくんとリホちゃんが残る。

●【回想】ダイキくんの世界2

リストカットを続けているリホちゃん。

ダイキくん、心配そうな顔で

ダイキくん 「荒れてるね」

リホちゃん 「ダイキくん！」

リホちゃん、慌ててカッターをしまう。

ダイキくん 「もうしないでって言ったよねえ」  
リホちゃん 「ごめん、ごめんね、違うの、リホもしたくなかったの」  
ダイキくん 「チョーしてるじゃん」  
リホちゃん 「違うの、ごめんなさい、ねえごめんね」  
ダイキくん 「リホちゃん、謝ってばかり」  
リホちゃん 「ごめんなさい」  
ダイキくん 「ほら。謝るんじゃないで、ありがとう、ってたくさん言えるよ  
うになろうね」  
リホちゃん 「？」  
ダイキくん 「謝ることより、人に感謝できる人の方が、ぼくは好きだなあ」  
リホちゃん 「分かんない」

ダイキくん、溜息。

リホちゃん 「え、いやだ」  
ダイキくん 「なに」  
リホちゃん 「見放さないで」  
ダイキくん 「見放さないよ」  
リホちゃん 「ホント？」  
ダイキくん 「うん」  
リホちゃん 「ホントにホント？」  
ダイキくん 「うん」  
リホちゃん 「嫌いにならない？」  
ダイキくん 「うん」  
リホちゃん 「絶対の絶対？」  
ダイキくん 「うん。ぼくはリホちゃんの味方だからね」  
リホちゃん 「やった！ ホントにホント？」  
ダイキくん 「ホントだよ」  
リホちゃん 「ふふふふくん（首をダイキくんの肩に載せる）」  
ダイキくん 「どうしたのさ」  
リホちゃん 「ね、聞いて聞いて。ヒドいの」  
ダイキくん 「なんだい」  
リホちゃん 「おねえちゃんがね、リホがいけないんだって言うの」  
ダイキくん 「なんだなんだ？？」  
リホちゃん 「リホがたっくんを誘惑したって言うの。だからたっくんはリホ  
のことを好きになっちゃったんだって」



ダイキくん 「お姉ちゃんの彼氏？」

リホちゃん 「そう、たっくん。ねえひどいよね！ ひどくない！！？ リホなんもしてないんだよ？ だってするわけなくない？？」

ダイキくん 「するわけないねえ」

リホちゃん 「だってリホが好きなのは新田先生じゃん！ たっくんのことなんて、お姉ちゃんの彼氏、としか思っただけなの」

ダイキくん 「そうだろうねえ」

リホちゃん 「なのにああ！ おねえちゃんはリホが悪い、リホのせいでたっくんはわたしを捨てるんだ、って」

ダイキくん 「リホちゃんのせいだって？」

リホちゃん 「そうなの。何もしてないよ、って言っても信じてくれないの」

ダイキくん 「それは悲しくなっちゃうよね」

リホちゃん 「うん、そうなの。リホ、すごく悲しくなっちゃったの」

ダイキくん 「うんうん」

リホちゃん 「だから、ね、リホもしたくないししちやいけないと思ってたんだけど……」

ダイキくん 「切っちゃったんだねえ」

リホちゃん、頷く。

リホちゃん 「ごめんなさい……ごめんなさい」

ダイキくん 「謝らなくていいんだよ、悪くないんだから」

リホちゃん、ダイキくんに泣きつく。

ダイキくん、リホちゃんの頭を優しく撫でる。

ダイキくん 「つらかったねえ」

リホちゃん、泣きじゃくる。

ダイキくん 「よしよしよし」

リホちゃん 「うっうっ」

ダイキくん 「つらかったつらかった。よく頑張ったねえ」

リホちゃん 「うううう」

ダイキくん 「治したいかい？」

リホちゃん 「……え？」

新田先生がカルテを持って入って来る。

ダイキくん 「新田先生に気が付いて」 先生」

## ○【回想】新田先生の診察室2

新田先生、椅子に掛ける。

新田先生 「リホちゃん」

リホちゃん 「先生」

リホちゃん、椅子に座り、新田先生と向かい合う。

リホちゃん、腕を差し出す。

新田先生 「だいぶ切ったねえ」

リホちゃん 「はい」

新田先生 「つらいことがあった？」

リホちゃん 「いつもつらいです」

新田先生 「いつも」

リホちゃん 「人に信じてもらえなかったり、人が信じられなかったり、（新田先生を見つめて）好きな人に振り向いてもらえなかったり」

新田先生 「……」

リホちゃん 「つらいし、悲しいです。自分が自分で嫌になる」

新田先生 「どうして」

リホちゃん 「自分の精神が弱いから」

新田先生 「そんなことないよ」

リホちゃん 「わたしは、普通の人なら耐えられるようなことでも、簡単に無理になっちゃう」

新田先生 「普通の人だって、みんなつらいんだよ。誤魔化してるだけ」

リホちゃん 「先生は優しい」

新田先生 「ありがとう」

リホちゃん 「……本当に好きなのになあ」

新田先生 「……ありがとう」

リホちゃん 「ありがとう、か」

間

リホちゃん 「わたし、メンヘラ辞めたい」

新田先生 「リホちゃん」

リホちゃん 「精神弱いので、治したいよお」

新田先生、頷く。

リホちゃん 「こんな自分、嫌だから（頭を下げる）」

新田先生 「うん」

リホちゃん 「メンヘラ、辞めたいよお」

新田先生 「リホちゃん」

リホちゃん 「死にたいよお」

リホちゃん、新田先生に縫りつく。

リホちゃん 「消えたいよお」

新田先生、デスクからカルテを取って

新田先生 「定期的にテストをしているだろ？」

新田先生、緩やかにリホちゃんを離す。

リホちゃん 「？」

新田先生 「アンケートみたいなの」

リホちゃん 「え、ああ、うん。たまにしてる」

新田先生 「これが」

新田先生、カルテをリホちゃんに見せる。

新田先生 「その結果」

リホちゃん 「（紙に目を通して）……なんですかこれ」

新田先生 「リホちゃん、きみは退行性人格障害の疑いがある」

リホちゃん 「退行性……人格障害？」

新田先生 「（頷いて）退行、つまり幼くなっちゃう」

リホちゃん 「……? どういうこと」  
新田先生 「一番の友達は何？ いる？」  
リホちゃん 「ちよつと、いきなりそんな」  
新田先生 「親友と言えるような人、いる？」  
リホちゃん 「失礼だなあ、新田先生は」  
新田先生 「……………」  
リホちゃん 「いますよ、親友」  
新田先生 「どんな子」

リホちゃん、ダイキくんを見て

リホちゃん 「……ダイキくん。優しくてわたしのことを一番に考えてくれて」  
新田先生 「(頷いて) そのダイキくんって子は、いつからの親友？」  
リホちゃん 「え、もうずっと昔からだよ。幼馴染みたいなの？」  
新田先生 「(少し考えて) そう。それならいいんだ」  
リホちゃん 「? なんで」  
新田先生 「いや……(茶を濁すように) リホちゃんは、この障害を良くしたいかい？」  
リホちゃん 「良くする? ……治るの？」  
新田先生 「病気になるいから、治るとい言葉が適切かどうかは分からないけれど……良くすることはできるよ」  
リホちゃん 「良くする」  
新田先生 「うん」  
リホちゃん 「どうやって」  
新田先生 「良くしたいんだね？」  
リホちゃん 「もちろん！」  
新田先生 「そうか」  
リホちゃん 「うん」  
新田先生 「そのためには、一番の親友の助けが必要かもしれないから」

ダイキくん 「リホちゃん」

リホちゃん、ダイキくんの方を振り向く。

ダイキくん 「リホちゃん。ぼくと一緒に、良くしていこうよ」  
リホちゃん 「いいの？」

ダイキくん 「もちろんだよ」  
リホちゃん 「新田先生、ダイキくんが、助けてくれるって！」  
新田先生 「そうか、良かったね」  
リホちゃん 「うん！」  
新田先生 「ありがとうね、ダイキくん（本当は見えていない）」  
ダイキくん 「いやあ、当然のことですよ」  
新田先生 「よろしくね」  
ダイキくん 「はい」  
リホちゃん 「（ダイキくんに）よろしくね」  
ダイキくん 「いい人だね」  
リホちゃん 「うん。でしょ？ （耳打ち）わたしの好きな人だから」

新田先生、リホちゃんの方を向き直り

新田先生 「いい友達を持ったね」  
リホちゃん 「うん。一番の親友だから」  
新田先生 「そうだね」  
リホちゃん 「で、どうすればいいの？」  
新田先生 「そう、それだけ……まずは処方した薬を正しく飲むこと」  
リホちゃん 「うん」  
新田先生 「できる？ オーバードーズしないんだよ？」  
ダイキくん 「できるかい？」  
新田先生 「それと……ちよつと待ってね」

新田先生、ハケる。

リホちゃん 「……うん」  
ダイキくん 「できるよね？」  
リホちゃん 「……」  
ダイキくん 「新田先生に手紙渡すんだろう？ 好きになってもらうんだろ  
う？」  
リホちゃん 「そう！ そう！ でもこの前、医者と患者じゃ」  
ダイキくん 「だから、新田先生の患者じゃなくなればいいじゃないか」  
リホちゃん 「え……でもそれじゃ、新田先生に会えなくなる？」  
ダイキくん 「それでいいんだよ。そうじゃないと、リホちゃんは好きになっ  
てもらえないよ」

リホちゃん 「そっか。新田先生のお世話にならなければ」  
ダイキくん 「そうそう。新田先生はリホちゃんを好きになるかもしれない」  
リホちゃん 「分かった」

新田先生、ノートを持って戻って来る。

新田先生 「これに書くんだ」

リホちゃん 「ノート？（ノートを受け取る）書く？」

新田先生 「手を切りたくなったら、切る前にぐっと堪えてこれに書いて」

リホちゃん 「何を？」

新田先生 『腕を切りたい』って」

リホちゃん 「腕を切りたい？ 『腕を切りたい』って書けばいいの？」

新田先生 「（頷いて）あとは、どうして切りたくなったのか。簡単でいいから」

リホちゃん 「そのときの状況とか、なんで切りたくなったか、とか？」

新田先生 「そう」

リホちゃん 「（ダイキくんに）できるかなあ、大変そう」

新田先生 「だから、簡単でいいんだ。事細かに書くことよりも、とにかく書くことが大事なんだよ。切りたくなったら書く、切りたくなったら書く……そういう習慣をつけて欲しい」

ダイキくん 「ぼくも応援するからさ」

新田先生 「ダイキくんにも、手伝ってもらおうといいよ」

リホちゃん 「（ダイキくんに）だって」

ダイキくん 「もちろん、手伝うよ」

リホちゃん 「ごめんね」

ダイキくん 「ごめんねじゃなくて？」

リホちゃん 「ありがとう」

ダイキくん 「そう。ぼくも手伝うから切っちゃだめだよ？」

リホちゃん 「うん」

新田先生 「切らないでいられるかな？」

リホちゃん 「頑張ってみる」

新田先生 「よし。それで診察のときに、また持って来てね。見せてもらいたいから」

リホちゃん 「書いて、持ってくれば、いいのね？」

新田先生 「ああ」

リホちゃん、ダイキくんを見る。  
ダイキくん、頷く。

リホちゃん 「これで、治る？」

新田先生 「良くなるよ」

リホちゃん 「そっか……良くなるんだ。わたし、メンヘラ治るんだ」

新田先生 「良くなるさ。ぼくと、……ダイキくんが付いているんだから」

リホちゃん 「そっか。うん、そっか。新田先生と、ダイキくんが付いているんだもんね」

リホちゃん、立ち上がる。

リホちゃん 「先生！ わたし、頑張る！」

新田先生 「ああ、頑張れ」

リホちゃん 「切らずに、切りたいて書いて書けばいいのね」

新田先生 「そうだよ」

リホちゃん 「やってみます。ありがとうございます、先生（一礼）」

リホちゃん、一礼してハケようとする。

新田先生 「お大事に」

リホちゃん、ハケかけて止まり、新田先生に背を向けたまま

リホちゃん 「先生」

新田先生 「ん？」

リホちゃん 「治ったら、……良くなったなら好きになってくれますか？」

新田先生、少し虚を突かれて

新田先生 「ああ」

リホちゃん 「ホント？？？」

新田先生 「……」

リホちゃん 「やったやったやった！！ やったやったやった！！！！ 先生、わたし頑張る！！ ダイキくん、行くよ！」

リホちゃん、ハケる。

ダイキくん 「新田先生、ありがとうございます。リホちゃんのために、色々としてくれて……ありがとうございます。リホちゃん、手紙、渡した〜?」

ダイキくん、ハケる。

リホ声 「無理だった! 343 枚目…」  
新田先生 「ダイキくん……」

新田先生、ソファに移動する。  
キホちゃんも現れ、ソファに座る。

## ○リホちゃんとキホちゃんの家2・2

キホちゃん 「なるほど、そんなことが」

新田先生 「うん」

キホちゃん 「それでも、悪いのはわたしだから」

キホちゃん、溜息を吐いて俯く。

キホちゃん 「もうチョー自己嫌悪。たつくんがリホのこと好きだったことも、リホに当たっちゃったことも、たつくんがリホのこと好きだったって気づけなかったことも、今こうやって弱音吐いていることももう全部全部全部チョー……やだ!!! 最悪!」

新田先生、キホちゃんの横に座る。

新田先生、キホちゃんの頭を撫でる。

キホちゃん、俯いたままちよつと笑って

キホちゃん 「なに? 慰めてるの?」  
新田先生 「……」

キホちゃん 「新田てさ、何考えてるか分かんないよね」  
新田先生 「ぼくは表情が出ないんだ。感情はある」  
キホちゃん 「ふくん、分かんないや。今どんな感情?」



新田先生 「……………」  
キホちゃん 「ねえ、新田先生」  
新田先生 「好き」  
キホちゃん 「え？」  
新田先生 「好きだよ、キホ」  
キホちゃん 「え」  
新田先生 「ずっと、ずっと、ずっと前から、好きだったよ」

リホちゃん、出てくる。

リホちゃん 「だめだ……どーしても途中で目が（冴えちやって）……」

新田先生が、リホちゃんにキスをしている。

リホちゃん、二人のキスを目撃してしまう。

リホちゃん、カッターを取り出す。

M、アーバンギャルド『u星より愛をこめて』

L、リストカット

新田先生とキホちゃん、静止。

### ●リストカット3

リホちゃん 「うわあああああああああああ……ごめん、ダイキくん、わたし、やっぱり、やっぱり、つらいよおおおお」

リホちゃん、リストカット。

### ●ダイキくんの世界3

ダイキくんの声！

ダイキ声 「切っちゃだめ！！」  
リホちゃん 「え！」  
ダイキ声 「リホちゃん！切っちゃだめだ！！」  
リホちゃん 「ダイキくん！？どこ！？」  
ダイキ声 「切っちゃだめ！！」  
リホちゃん 「どこにいるの！？」

ダイキ声 「リホちゃん！ 切っちゃだめだ！！」

リホちゃん 「ダイキくん！？」

ダイキ声 「切っちゃだめ！！」

リホちゃん 「だ、ダイキくん……？」

ダイキ声 「リホちゃん！ 切っちゃだめだ！！」

リホちゃん 「これって……」

ダイキ声 「切っちゃだめ！！」

リホちゃん！ 切っちゃだめだ！！

切っちゃだめ！！

リホちゃん！ 切っちゃだめだ！！」

リホちゃん 「録音！！」

ダイキくん 「(出てきて) リホちゃん！ 今からノートを送るから」

リホちゃん 「あれ？ 録音じゃない！？」

ダイキくん 「ノートに、書くんだ！！(ハケる)」

リホちゃん 「ダイキくん！？ ノートを送るって！？ ハケんの！？」

新田先生とキホちゃん、動き出す。

新田先生 「(首を横に振って) 薬物療法だけだと、もう頭打ちだと思って、

ノートに書くように言ったよ」

リホちゃん 「新田先生！？」

キホちゃん 「は?? ノートに書く」

リホちゃん 「おねえちゃんも」

新田先生 「(首を横に振って) 薬物療法だけだと、もう頭打ちだと思って、

ノートに書くように言ったよ」

キホちゃん 「は?? ノートに書く」

新田先生 「(首を横に振って) 薬物療法だけだと、もう頭打ちだと思って、

ノートに書くように言ったよ」

キホちゃん 「は?? ノートに書く」

リホちゃん 「今度はこっちが壊れた」

新田先生 「そう！ ノートに書くん。そうすれば自分の心を内省するこ

とができる。冷静になることができる。感情と行動の間にある認  
知を見ることが出来る」

新田先生、デスクからノートを取り出す。

キホちゃん 「それって、もしかして！」

新田先生 「そう……認知行動療法だ！」

キホちゃん 「認知行動療法！」

新田先生 「認知行動療法！ 感情ではなく、感情に対する認知を変えることで行動を変える、最もオーソドックスでエフェクティブな治療法！」

リホちゃん 「認知行動療法！」

新田先生 「認知行動療法の力を信じなさい」

新田先生、ノートを持ってリホちゃんの方へ歩み寄る。

キホちゃん 「認知行動療法の力を信じなさい」

リホちゃん 「ダイキくん、ノートを送るってこれ！？」

ダイキ声 「そうだよ、さあ、ノートを受け取るんだ！」

新田先生 「認知行動療法の力を信じなさい」

キホちゃん 「認知行動療法の力を信じなさい」

リホちゃん 「なんか雑だなあ」

新田先生とキホちゃん、ハケる。

リホちゃん、ノートを受け取る。

ダイキ声 「さあ、ノートを開いて」

リホちゃん 「え、開くの？」

リホちゃん、開く。

リホちゃん 「怒濤の後半、始まる」

ダイキ声 「怒濤の後半、始まります！！」

L、暗転

リホちゃん 「え！？ なにそれ！？ うそ、何この展開！！」

L、明転

リホちゃんとダイキくんが、舞台中央にいる。

リホちゃん、めちやくちゃんにノートに書きまくっている。

リホちゃん 「うおおおおおおお！！ ごめんなさい、ごめんなさい」  
ダイキくん 「ごめんじゃなくて、人に感謝を！」

リホちゃん 「うおおおおおおお！！ 切りたい、切りたい！」

ダイキくん 「書いて！ リホちゃん！ 書いて！！」

リホちゃん 「うううううう……うううううう……切りたい、切りたい！ 切り  
たいよおおおおお！！！！」

ダイキくん 「切っちゃだめ！！ 新田先生に好きになってもらうんでき  
よ！？」

リホちゃん 「そう、そうだ！ 新田先生、新田先生！！ 好き、好き、大好  
き！！ なのに！！ なんで！！！！ あああああ、切りたい切り  
たい切りたい！！」

ダイキくん 「だめ！！ 切らないで、我慢して！！ 書いて！！」  
リホちゃん 「うおおおおおおお！！！！ 2018年1月某日、腕を  
切りたい腕を切りたい腕を切りたい、腕を切りたくなつた！！  
猛烈に切りたい！ 新田先生がおねえちゃんとキスをしていた！」

新田先生とキホちゃん、出てきてキス。

リホちゃん 「新田先生がおねえちゃんのことを好きなことは知っていたけど、  
目の当たりになってしまうなんて、つらいつらい！！ 仮にも  
わたしは新田先生のこと大好きなのだ、大好きな新田先生が、自  
分の姉を好きになっていることが、不思議で、苦しくて、どうしよ  
うもなくもやもやする！ 先生、先生、わたしのこと好きになつて  
よ、わたしのことを見てよ！」

新田先生、キホちゃん、ハケる。

リホちゃん 「うわあああああ、そして今日も手紙は渡せない！ 402枚目」

ダイキくん 「大丈夫、次があるさ！」

リホちゃん 「次！」

ダイキくん 「そうだ、次だ！」

リホちゃん 「あああああ、ごめんなさい、ごめんなさい」

ダイキくん 「謝らないで！ ありがとうを！」

リホちゃん 「切りたい、切りたい！」

ダイキくん 「だめだめだめ！ 切っちゃだめだよ！！ 切りたいよおおお！」

2018年2月某日」

キホちゃんとたつくん、やって来る。  
たつくん、ソワソワしている。

ダイキくん 「きた！」

リホちゃん 「2018年2月某日、ああああああああああ、腕を切りたい  
切りたい切りたい切りたい！」

キホちゃん 「……………たつくん」

キホちゃん、ソファに座る。

キホちゃん 「来てよ」

たつくん 「え」

キホちゃん 「彼女が寂しがってるでしょ、なんとかしなさいよ」

たつくん 「う、うん」

たつくん、キホちゃんの横に座る。

キホちゃん 「サイテー（たつくんを小突く）」

たつくん 「……………ゴメン」

キホちゃん 「ゴメンじゃねえよ」

たつくん 「ゴメン」

キホちゃん 「食い気味で言っても許さないぞ」

たつくん 「……………うん」

キホちゃん 「うん、て」

間

キホちゃん 「どこがよかったの？ リホの」

たつくん 「……………え」

キホちゃん 「言つてよ。わたしには知る権利があると思うんだけど」

たつくん 「そうだね……………3年くらいキホと付き合っ、この家にも何度

となく来たでしょ？」

キホちゃん 「うん」

たつくん 「3人で遊んだこともある」

キホちゃん 「うん」

たつくん 「その、リホちゃんの持つ独特の……愛想? かな」

キホちゃん 「愛想」

たつくん 「あと、翳り……?」

キホちゃん 「翳り」

たつくん 「みんなで楽しく過ごしてるんだけど、そのときにちよつと見える『わたし、自信ないんです』みたいなき。控えめなところ」

キホちゃん 「はあああ」

たつくん 「そういうところが、いいなって」

キホちゃん 「ごめんね、わたしには愛想も陰りもなくって」

たつくん 「……」

キホちゃん 「否定しろよ!!」

たつくん 「あ、ゴメン」

キホちゃん 「なんなんだおまえ! もう何しに来たんだよ!」

間

キホちゃん 「何とか言つてよ!!!」

たつくん、立ち上がり

たつくん 「謝ろうと思つて、きちんと」

キホちゃん 「え、ちよつと待つて、ちよつと待つて。え」

たつくん、頷く。

キホちゃん 「別れる……つて(こと?)」

たつくん 「あ、逆」

キホちゃん 「え」

たつくん 「あ、逆、逆。別れるんじゃないなくて、ちゃんと、付き合いたいなつて」

キホちゃん 「うん、うん? うん?」

たつくん 「キホには、すごく申し訳ないことをしたし」

キホちゃん 「うん、うん、うん?」

たつくん 「リホちゃんにも、嫌な思いをさせてしまたし」

キホちゃん 「うん、うん、うん」

たつくん 「でも、すごく反省して、やっぱおれ、キホと一緒にがいいなって！」

キホちゃん キホが一番 proud of you だってー」

たつくん 「は？」

「I'm so proud of you that I (will make you the happiest girl in the world.)」

キホちゃん 「意味が分からない！」

たつくん 「恥ずかしいだろ！」

キホちゃん 「はああ??」

たつくん 「恥ずかしいから英語にしてんだろ！」

キホちゃん 「逆ギレ!？」

たつくん 「大事ってことじゃん、一番……大事ってことだろうが！」

キホちゃん 「大事って」

たつくん 「大事は大事だよ」

キホちゃん 「……インポテンツってこと？」

たつくん 「Important な！ インポテンツって、ばかな！ ビンビンだろうが」

キホちゃん 「うるさいなあ！ 結局わたしとまだ付き合いたいの？ 付き合いたくないの？」

たつくん 「……前者」

キホちゃん 「はつきり言いなさいよ！ 男なんだから」

たつくん 「まだ、付き合っしてほしいです」

キホちゃん 「言い方が雑。ちゃんと言ったらどうですか」

たつくん 「こういう愛想が」

キホちゃん 「なんか言った？」

たつくん 「なんも！」

キホちゃん 「早く言つてよ」

たつくん 「(ぼそぼそ) これからも、ずっと付き合いたいです」

キホちゃん 「は？」

たつくん 「これからもずっと付き合いたいです」

キホちゃん 「もう一回」

たつくん 「これからもずっと付き合いたいです」

キホちゃん 「リホと？」

たつくん 「キホと」

キホちゃん 「わたし、新田に告られたけど、それでもいい？」

たつくん 「うん。は!?? うそだろ??」

キホちゃん 「あ、もちろん速攻断ったよ」

たつくん 「当たり前だ」

キホちゃん 「でもね、気づいたの」

たつくん 「……なに。え、チューした？ チューした？」

キホちゃん 「わたしと新田は、生まれたときから家も近くで、まあ一言でいえば幼馴染なの」

たつくん 「うん」

キホちゃん 「だから、正直わたしは恋愛対象には見えていなくて。特別な存在って言ったならそうなのかもしれないけれど、少なくとも異性として、恋愛としての対象では全然ないの」

たつくん 「分かる気がする」

キホちゃん 「わたし、新田に何一つ好かれようと思って行動したことなんてなかったし、誘惑なんて微塵もしてないの」

たつくん 「そうだよなあ。恋愛対象じゃないんだから」

キホちゃん 「それでも、好かれちゃうときは好かれちゃうんだなあ、って。

たつくん 「告られちゃうときは、告られちゃうんだなあ……」

「男っていうのは、そういう馬鹿なところがある生き物なんだよ。こう、直情径行くっていうのかな。思ったこと感じたことは、言っておかきや・やっておかきや気が済まないっていうか」

キホちゃん、叩く。

キホちゃん 「ばーか」

たつくん 「ええ」

キホちゃん 「そんなの、人によるでしょ！」

たつくん 「！ 確かに」

たつくんとキホちゃん、見つめ合って、キス。

ダイキくん 「うわあああああああああ！」

リホちゃん 「何普通に復縁してんのよ！！ うわあああああ切りたい切りた

い切りたい！！！！」

ダイキくん 「だめだよ、辛抱して！！ ノートに書いて！！」

リホちゃん 「結局わたしは弄ばれただけじゃん！！ わたしのこと好きじゃ

なかったんかい！ 愛想とか翳りとかなんだったの、結局元鞘に納まつちやつて。おねえちゃんもおねえちゃんだし！ なんだよ、



甘々だよ！ たつくんに甘々だよ。甘々と稲妻だよ！」

ダイキくん 「それはいいマンガだよ！」

リホちゃん 「もうやだ、もうやだ、わたしってなにわたしってなに？？ わたしは誰からも必要とされないの？？ 先生からも、たつくんからも、おねえちゃんからも？？ 生きててごめんなさい」

ダイキくん 「すぐ謝らない！ ぼくがいるじゃないか！」

リホちゃん 「ダイキくん……ダイキくんしかもういないよ。ダイキくんは、

わたしのこと、見放さないよね？」

キホちゃんとたつくん、ハケる。

たつくん 「え、本当に断った？ 断ったんだよねえ？（しつこく）」

ダイキくん 「ああ」

リホちゃん 「2018年3月某日 新田先生がおねえちゃんと楽しくおしゃべりをしている。二人は幼馴染だからいいんだけど、そんな光景を要るだけでも、わたしはもうどうしようもなく居たたまれなくなってしまう」

キホちゃんと新田先生が通過する。

リホちゃん 「こんなことですら切りたくなってしまう。切りたくなってしまう。そんな自分が嫌だ嫌だ嫌だ」

ダイキくん 「頑張ってリホちゃん、ファイトだよ！ 負けないで、自分に負けないで！」

リホちゃん 「ダイキくんの応援がなかったら、絶対切ってた！ 接待に負けたくない、切らないぞ！」

2018年4月某日 わたしの誕生日！ 今日だけはわたしは特別でいたい！」

ダイキくん 「リホちゃん、誕生日おめでとう！ いくつになったの！」

リホちゃん 「はっちゃい！」

ダイキくん 「チビシー！」

リホちゃん 「もとい、19歳である。めでたい、実にめでたい。先生からはお祝いのメールが届いた！ めちゃくちゃハッピー！ やっぱ先生大好き！」

新田先生、現れる。

新田先生 「リホちゃん、二十歳の誕生日おめでとう。二十歳。色々なことが大きく変わる年ですね。お酒が飲めたり、タバコが吸えたり、選挙に行けたり……」

新田先生、ハケる。

リホちゃん 「選挙に行けたり……うんぬんかんぬん。そんな感じのメール。嬉しいなあ……。が、二十歳になったのではなく、19歳になったのである。そして選挙は、18歳から行ってた。なので先生のあのメールは間違い。そういうお茶目なところも、可愛い。『先生、嬉しいです。二十歳になったら、お酒飲みに行きましょう。立憲民主党が、好きです』送信。しかし」

たつくとキホちゃん、現れる。

キホちゃん 「ねえ、なんで牛乳入れるの？」

たつくん 「え、なんでって、辛いし。え、だっておれいつも入れてるじゃん」

キホちゃん 「いつもは普通のカレーじゃん！ 今日のはグリーンカレーでしょ」

たつくん 「え、あ、これグリーンカレーって言うの？」

キホちゃん 「グリーンカレーじゃん！」

たつくん 「分かんないよ、言ってくれなきゃ」

キホちゃん 「見た目が全然違うじゃん！」

たつくん 「分かんないよ！」

キホちゃん 「嘘でしょ？ 全然違いますやん」

たつくん 「や、分かんない分かんない。緑じゃないじゃん」

キホちゃん 「ちよつと緑じゃん」

たつくん 「分かんない分かんない」

キホちゃん 「信じらんない！」

たつくん 「え、てか牛乳入れちゃだめだった？」

キホちゃん 「初めて作ったのに……そんなん全部牛乳の味になっちゃうじゃん」

たつくん 「だから、普通のカレーだと思ったんだって。先にグリーンカレ

「だよ、って言うてくれないと」

キホちゃん 「分かると思っただよ！ 言わなくてもグリーンって！」

たつくん 「分かんないよ！」

リホちゃん 「ひどくどうでもいい喧嘩だったんだけど」

キホちゃん 「もう嫌だ！ 帰って！！ 疲れた！ 帰って！」

たつくん 「あああ？ なんだよ急に」

キホちゃん 「うるさい！ 帰って！」

たつくん 「はああ？？？ まじかよ」

キホちゃん 「帰って」

たつくん、ハケる。

リホちゃん 「おねえちゃん……たつくんと喧嘩したの？」

キホちゃん 「うるさい！ してない！ 関係ない！！」

キホちゃん、ハケる。

リホちゃん 「ちよつと、これからご飯……どこ行くの」

キホちゃん 「うるさい！ 要らない！」

リホちゃん 「ええ……」

リホちゃん、ダイキくんの方を見る。

ダイキくん 「あちゃあ、虫の居所が悪かったのかな」

リホちゃん 「わたし今日誕生日なのに……おねえちゃん……（涙が出てくる）」

ダイキくん 「リホちゃん、リホちゃん……！ ハッピーバースデートゥーユー

……ハッピーバースデートゥーユーハッピーバースデーディアリホちゃん」

リホちゃん 「うん、うん……ありがとう。ありがとう、ダイキくん、ありが

とう（くすん）」

ダイキくん 「ハッピーバースデートゥーユー」

リホちゃん 「2018年5月某日。友達の〇〇が自分の陰口を」

ダイキくん 「切らないで切らないで、我慢して！」

リホちゃん 「切りたい……つらい、苦しいよお」

ダイキくん 「切らないで、切らないで！ ノートに書いて！！」

リホちゃん 「ダイキくんがいるから。新田先生に会いたいから！」

ダイキくん 「頑張れ、頑張れ、頑張れ！」

リホちゃん 「2018年6月某日。梅雨で低気圧、毎日がただでさえ陰鬱。友達の△△と些細なことで」

ダイキくん 「つらいよ、苦しいよ、でも負けちゃだめ！ 切らないで！ ノートに書いて！！！」

リホちゃん 「うおおおおおおおおお切ってなんて、なるものくわああああああ！」

ダイキくん 「そのガッツだよおおお！」

リホちゃん 「2018年8月某日……ダイキくんが助けてくれた」

ダイキくん 「ノートに書いて！！！」

リホちゃん 「2018年11月某日……バイトに落ちた」

リホちゃん 「ノートに書いて！！！」  
「2019年3月某日……久しぶりに大きい鬱だ。ああ、もう寝てしまおうかなあ。縦になれない。縦になっていることが難しい。寝よう。ダイキくん、久しぶりに見た気がする。励ましてくれる」

ダイキくん 「ノートに書いて！！！」

リホちゃん 「2019年8月某日……」

キホちゃん、たつくん、新田先生、現れる。

たつくんとキホちゃんは、腕を組んでいる。

新田先生 「(号泣しながら)ご結婚、おめでとうございます」

たつくん 「ありがとうございます」

キホちゃん 「ありがとうございます」

新田先生 「(号泣しながら) それでは、お色直し」

ダイキくん 「おめでどう！ ございます！！！」

たつくん、キホちゃん、ハケる。

新田先生、ハケる。

リホちゃん 「おねえちゃんとかたつくんが、結婚した。いいなあ。嬉しそうだったなあ、二人とも」

ダイキくん 「ノートに書いて！！！」

リホちゃん 「2020年2月某日……インターンに落ちた」

ダイキくん 「ノートに書いて！！！」

リホちゃん 「2020年9月某日……就活、かあ。ごめんなさい」

ダイキくん 「謝らない！ ノートに書いて！！」  
リホちゃん 「2021年5月某日……ごめんなさい」  
ダイキくん 「謝らないで！ ノートに書いて！！」  
リホちゃん 「2022年2月某日……ごめんなさい」  
ダイキくん 「謝らないで！ ノートに書いて！！」  
リホちゃん 「2022年12月某日……ごめんなさい」  
ダイキくん 「謝らないで！ ノートに書いて！！」  
リホちゃん 「2023年11月某日……ごめんなさい」  
ダイキくん 「謝らないで！ ノートに書いて！！」  
リホちゃん 「2024年11月某日……ごめんなさい」  
ダイキくん 「謝らないで！ ノートに書いて！！」

間

ダイキくん 「謝らないで！ ノートに書いて！！ リホちゃん、ノートに書いて！ 切らないで、頑張って、耐えて、耐えて、耐えて、耐えて、ノートに書いて、ノートに書いて、リホちゃん、ノートに書いて！！！」

し、暗転

### ○新田先生の診察室（2024）

新田先生とリホちゃんが対座している。

新田先生は、ノートを読んでいる。

デスクの上にはノートが10冊くらい詰まれている。

新田先生 「2018年頭から6年間、溜まったねえ」  
リホちゃん 「溜まりました」  
新田先生 「うん。ちゃんと書いたんだね」  
リホちゃん 「うん、書きました」  
新田先生 「うん」

新田先生、リホちゃんに手を出す。

リホちゃん、新田先生に左手を出す。

新田先生、リホちゃんの左手首を診る。無傷。

新田先生 「うん、ありがとう」  
リホちゃん 「切つてないから」  
新田先生 「そうか」  
リホちゃん 「うん」  
新田先生 「前にリホちゃん、精神が弱いのが治したい、って言っていたの、覚えてるかい？」  
リホちゃん 「覚えてるよ。だからこのノートの治療が始まったんでしょ？」  
新田先生 「そう。そうなんだよ」  
リホちゃん 「覚えてるよ。最初はめちゃ厳しかったんだから、切りたくて切りたくて切りたくて、なんか、離脱症状って言うのかな……切らないと体が震えてたの」  
新田先生 「うん、そうだったね」  
リホちゃん 「でも、新田先生が助けてくれたから、救われました」  
新田先生 「助けてないよ。リホちゃんが自分の力で助かったんだ。ぼくの力じゃない」  
リホちゃん 「ううん、そんなことない。この方法を提案してくれたのは、先生だから」  
新田先生 「いいえ」  
リホちゃん 「わたしの心は、強くなりましたか？」  
新田先生 「（勢い）なったよ……！」  
リホちゃん 「ホントに？」  
新田先生 「ああ、なった！ 腕を切つてないし、幼児退行ももう見られない、それに、ダ………ノートを見れば（ノートを開く）、思考がポジティブになっていることは間違いない！ 良くなってる、良くなったよ！ もう、リホちゃんは大丈夫だ！」  
リホちゃん 「じゃあ」  
新田先生 「寛解だ」  
リホちゃん 「寛解」  
新田先生 「おめでとう」  
リホちゃん 「わたし、良くなった……？」  
新田先生 「良くなったよ！」  
リホちゃん 「じゃあ」  
新田先生 「もう、通院は大丈夫だよ」  
リホちゃん 「え??」  
新田先生 「もう、今日で定期カウンセリングは最後だ」

リホちゃん 「もう、終わり？」  
新田先生 「そうだよ」  
リホちゃん 「もう、来なくていいの??」  
新田先生 「そうだよ」  
リホちゃん 「そうか……」

リホちゃん、立ち上がって、動く(?)

リホちゃん 「手紙、また書いてきたんだよ (手紙を出す)」  
新田先生 「！ まだ、書いていたんだね」  
リホちゃん 「当たり前だよ。1085枚目」  
新田先生 「こつちも、溜まったなあ」  
リホちゃん 「うん。溜まった」  
新田先生 「渡せそうかい？」  
リホちゃん 「渡さなくちゃ、絶対」  
新田先生 「そうだな」  
リホちゃん 「先生！ 覚えてる？」  
新田先生 「なにが？」  
リホちゃん 「わたしのこと……好きになるって！」  
新田先生 「……」  
リホちゃん 「わたしが良くなったら、先生はわたしのこと好きになるって！」  
新田先生 「リホちゃん」  
リホちゃん 「わたし、その言葉を信じて」  
新田先生 「リホちゃん」  
リホちゃん 「先生に好きになってもらいたくって」  
新田先生 「先生のこと大好きだから」  
新田先生 「ごめん」  
リホちゃん 「良くなったら、先生が好きになるって」  
新田先生 「ごめん、リホちゃん」  
リホちゃん 「先生に好きになってもらいたいから6年間」  
新田先生 「ごめん」  
リホちゃん 「つらいけど、一人で頑張ってこれたんだよ」  
新田先生 「ごめん」

キホちゃんとたつくん、現れる。

キホちゃんのお腹は大きい。  
キホちゃんとたつくん、ソファに座る。

新田先生 「キホ……」

たつくん、愛おしそうに大きくなったキホちゃんのお腹を撫でる。

リホちゃん 「おねえちゃんが、好きなんだね」

新田先生、頷く。

リホちゃん 「まだ、好きなんだね」

新田先生、頷く。

リホちゃん 「おねえちゃんはもう、結婚してるよ」

新田先生 「知ってるよ」

リホちゃん 「おねえちゃんはもう直ぐ、お母さんになるんだよ」

新田先生 「知ってるさ」

リホちゃん 「おねえちゃんにはもう、先生は」

新田先生 「だめ」

リホちゃん 「先生は」

新田先生 「言わないで」

リホちゃん 「おねえちゃんには」

新田先生 「言わないで」

リホちゃん 「届かないんだよ！」

新田先生 「分かってるさ」

リホちゃん 「ならどうして」

新田先生 「分かんないよ」

キホちゃん 「あ、今動いた」

たつくん 「どれどれ(キホちゃんのお腹に耳を当てる)」

キホちゃん 「また」

たつくん 「！ 動いた！！ 動いたねえ！！！」

キホちゃん 「分かった？」

たつくん 「分かった分かった。うわあ、赤ちゃんだ」



たつくん、キホちゃんのお腹に耳を当てる。  
S、胎動

リホちゃん 「それでも、まだ好きなの？」

新田先生 「……」

リホちゃん 「諦めきれないの？」

新田先生 「諦めきれないよ」

リホちゃん 「どうして！」

新田先生 「どうしても」

リホちゃん 「そんな。わたしは？」

新田先生 「……」

リホちゃん 「わたしはどうなるの？」

新田先生 「……」

リホちゃん 「わたしは先生のこと好きなんだよ？ 6年間、ううん、それより前から、ずっとずっと前から」

新田先生、首を振る。

リホちゃん 「そんな」

新田先生 「ごめん……でも、ぼくだってずっとずっと前から、キホのことが好きなんだよ。誰かと結婚するとか、母親になるとか関係ないくらい、ぼくはキホのことが、どうしようもなく好きなんだよ」

リホちゃん 「報われないって分かっているも？」

新田先生 「それはお互いさまじゃないか」

リホちゃん、へたり込む。

リホちゃん 「そんな……嘘でしょ」

ダイキくん、現れる。

リホちゃん 「だめ、だめだよリホ、へこたれちゃ……今日で最後なんだから、手紙、渡さなくっちゃいけないんだから」

新田先生 「諦めてくれないのか」

リホちゃん 「わたしの6年間……」

ダイキくん 「リホちゃん」

リホちゃん 「諦めるなんて……そんな」

新田先生 「報われないんだって」

リホちゃん 「(カッターを出して)……ごめんね先生、せっかく寛解って言うてくれたのに、ごめんなさい」

新田先生 「リホちゃん！(立ち上がる)」

たつくん 「パパですよ〜」

キホちゃん 「お父さんだよ〜、分かるかなあ？」

たつくん 「(赤ちゃんの声で)『パパ、パパ、早くパパに会いたいよお』」

キホちゃん 「あら、ママにも会いたいよねえ」

たつくん 『『うん、早くママにも会いたいよお』』

ダイキくん、リホちゃんをそっと抱きしめる。

ダイキくん 「切っちゃだめだよ」

リホちゃん 「無理。苦しい」

新田先生 「リホちゃん……？」

リホちゃん 「……え？」

新田先生 「今誰と」

リホちゃん 「え？ あれ？」

ダイキくん 「リホちゃんはもう6年間も、頑張ってきたじゃないか。その間にいろんなつらいことが合ったよね、何回も切りたくなったよね」

リホちゃん 「うん、つらかった、切りたかった」

新田先生 「ダイキくん……？」

リホちゃん 「声が……」

ダイキくん 「それでも切らずに頑張ってこられたじゃないか」

リホちゃん 「でも、でも」

ダイキくん 「今切ったら、ますます新田先生には好きになってももらえないぞ」

リホちゃん 「いやだ！」

ダイキくん 「つらくても、受け入れて、前に進まなくちゃ。リホちゃんが6年間やってきたように」

リホちゃん 「わたしそんなに強くないよ」

ダイキくん 「ううん、リホちゃんは強いよ。それはぼくが良く知ってる」

リホちゃん 「こんなことなら、好きなんて、病気なんて……」

ダイキくん、ノートを取ってリホちゃんの前に置く。

ダイキくん 「リホちゃん」

リホちゃん 「このノート」

リホちゃん、ノートを開いて

リホちゃん 「2018年1月某日、腕を切りたい腕を切りたい腕を切りたい、腕を切りたくなつた。猛烈に切りたい。新田先生がおねえちゃんとキスをしていた」

ダイキくん 「リホちゃん」

リホちゃん 「大好きな新田先生が、自分の姉を好きになつていることが、不思議で、苦しくて、どうしようもなくもやもやする。先生、先生、わたしのこと好きになつてよ、わたしのことを見てよ」

ダイキくん 「リホちゃん……ぼくのこととはもう、見えなくなったかい？」

リホちゃん 「2018年2月某日、腕を切りたい切りたい切りたい切りたい。何普通に復縁してんのよ。切りたい切りたい切りたい。結局わたしは弄ばれただけじゃん！！ ダイキくんしかもういないよ。ダイキくんは、わたしのこと、見放さないよね？」

ダイキくん 「ぼくことは、忘れられたかい？」

リホちゃん 「ダイキくん……？ 誰……？」

リホちゃん、ページをめくる。

リホちゃん 「2018年4月某日 わたしの誕生日。今日だけはわたしは特別でいたい。ダイキくん、ありがとう。……ここにも出てくる」

リホちゃん、ページをめくる。

リホちゃん 「2018年5月某日。ダイキくんがいるから。

（ページをめくり）2018年8月某日……ダイキくんが助けてくれた。

（ページをめくり）2019年3月某日……久しぶりに大きい鬱だ。ああ、もう寝てしまおうかなあ。縦になれない。縦になつていることが難しい。寝よう。ダイキくん、久しぶりに見た気がする。

励ましてくれる」

リホちゃん 「ダイキくん……?」

「ダイキくんの世界」の音声

新田先生の診察室の音声

リホちゃん 「あれ……あれ??」

新田先生、ハケる。

リホちゃん、キホちゃんとたつくんを振り返り

リホちゃん 「おねえちゃん、たつくん……」

キホちゃん 「(振り返って) なに?」

たつくん 「どうした?」

リホちゃん 「ダイキくんって」

キホちゃん 「ダイキくん?」

リホちゃん 「知ってる?」

キホちゃん 「誰?」

たつくん 「リホちゃんの友達?」

リホちゃん 「たぶん」

キホちゃん 「たぶんって」

たつくん 「どういう友達?」

リホちゃん 「それが……分からないの」

キホちゃん 「え? それじゃあわたしたちにも分からないよ。ねえ?」

たつくん 「そうだなあ」

リホちゃん 「でも、わたしにとって大切な、たぶん、とても大切な……人な  
んじやないかって」

キホちゃん 「でも思い出せないの?」

リホちゃん 「うん……」

たつくん 「じゃあ、この子(キホのお腹の中の赤ちゃん)に聞いてみよう  
か」

リホちゃん 「え」

たつくん 「パパですより、ちょっといいですかねえ。リホちゃんにとって

も大事なお友達のだいキくんって、知ってますか?」

キホちゃん 「応えてくれるかなあ」

たつくん

『知ってますよ。それはねえ、リホちゃんの心の中に住む、リホちゃんにとつて、とても大事なお友達なんですよ。』

リホちゃん

「心の中……」

たつくん

『でもリホちゃんが大人になったから……』

新田先生、ファイルを持って出てくる。

リホちゃん

「新田先生」

新田先生

「ダイキくんについてだよね？」

リホちゃん

「そう」

新田先生

「伝えていなかったことがあったんだ」

リホちゃん

「え」

新田先生、ファイルを出して

新田先生

「このファイルは、ぼくの方で付けてきたリホちゃんの記録だ」

リホちゃん

「そんなに」

新田先生

「認知行動療法を始める前からずっとだからね」

リホちゃん

「……」

新田先生

「リホちゃんを退行性人格障害と診断したのはね、リホちゃんが幼くなって自分の身を守ろうとするから、というだけじゃないんだ」

リホちゃん

「ええと」

新田先生

「リホちゃんに、親友はいるかな、と聞いたことがあったね」

リホちゃん

「うん」

新田先生

「そのときにリホちゃんが名前を挙げたのが、ダイキくんなんだよ。8年近く前のことだよ」

リホちゃん

「8年」

新田先生

「そう」

リホちゃん

「ダイキくんはいつたい」

新田先生

「イマジナリーフレンドだよ」

リホちゃん

「イマジナリーフレンド」

新田先生

「架空の友達、と直訳される」

リホちゃん

「ダイキくんは、架空……？」

新田先生

「そうだよ」

リホちゃん

「でも、ノートには、わたしの書いたノートには」

新田先生 「リホちゃんには、見えていたんだ」

リホちゃん 「え」

新田先生 「現実の存在のように」

リホちゃん 「え」

新田先生 「退行性人格障害には、リホちゃんみたくイマジナリーフレンドが視認できる人がいるんだ」

ダイキくん 「リーホちゃん」

リホちゃん、振り返る。

新田先生 「どうしたの？」

ダイキくん 「リホちゃん」

リホちゃん 「また声が」

新田先生 「え」

ダイキくん 「リホちゃんはもう、大丈夫そうだね」

リホちゃん 「声が、聞こえるような気がする」

新田先生 「声……」

リホちゃん 「気のせいかな」

ダイキくん 「リホちゃんがぼくを見られなくなって、ぼくはひとりになった」

新田先生 「ダイキくん……いや、まさか」

リホちゃん 「どうしてダイキくんは、見えなくなってしまったの」

ダイキくん 「でも、ぼくは嬉しい」

新田先生 「リホちゃんが、一人で生きていけるくらい強くなったからだよ」

ダイキくん 「リホちゃんが強くなったということだから」

新田先生 「大人のイマジナリーフレンドは、その人の、心の支えになるんだよ。その人の心が壊れないように、助けてくれる」

ダイキくん 「リホちゃんは悲しい現実から逃げるために手首を切った、なかなかやいになった、ぼくを作ってくれた」

新田先生 「当時のリホちゃんにとって、大事な存在だったんだよ」

リホちゃん 「どうしてわたしは、そんな大事なダイキくんを忘れてしまったの」

ダイキくん 「ぼくは、リホちゃんが生んだ、リホちゃんの心なんだよ。リホちゃん、病気を良くしたい、という願いそのものなんだよ」

リホちゃん 「いやだよ先生、わたし思い出したい、ダイキくんを思い出したい、ダイキくんを思い出したい……」

新田先生 「ダイキくんは」

リホちゃん 「大切な存在だったんでしょ？」

新田先生 「うん」

リホちゃん 「わたしの障害を、わたしの側で、わたしを励まして支えてくれたんでしょ？」

新田先生 「そうだよ」

リホちゃん 「どうしてわたし、そんな大切な人のことを忘れているの……嫌だ嫌だ嫌だ、思い出したい思い出したい、思い出したい」

ダイキくん 「ぼくはいなくなったりするんじゃない。帰るんだよ」

新田先生 「帰っていくんだ」

リホちゃん 「え」

新田先生 「帰っていくんだよ」

ダイキくん 「リホちゃんの心の中に」

リホちゃん 「わたしの、心の中？」

新田先生 「そうだよ」

ダイキくん 「だから安心して。ぼくはずっとリホちゃんの心の中にいるんだよ。ずっとリホちゃんのそばにいるんだよ」

リホちゃん 「忘れたくない、忘れたくないよ」

新田先生 「忘れるわけじゃない。ダイキくんは、リホちゃんの心に戻るんだよ」

リホちゃん 「でも、でもわたし、ダイキくんにもお礼も言えずに」

ダイキくん 「ううん。ぼくはリホちゃんに会えて、一緒に過ごせて、一緒に良くなって、リホちゃんの写真がどんどん増えていって、嬉しかった。幸せだった。だから、お礼なんて何もいらなんだよ」

リホちゃん 「お礼も言えずに、お別れなんて。会えずに、お別れなんて」

ダイキくん 「お礼を言いたいのぼくの方だよ、会いたいのぼくもだよ」

新田先生 「悲しい顔しちや、ダイキくんも、お別れできないよ」

リホちゃん 「え」

新田先生 「ダイキくん」

リホちゃん 「いるの？」

ダイキくん 「いるよ、ここにいるよ」

新田先生、頷く。

リホちゃん 「ダイキくん……ダイキくん！」

ダイキくん 「リホちゃん」

リホちゃん 「ダイキくん!! どこ……どこ、ダイキくん」  
ダイキくん 「リホちゃんの側に」  
リホちゃん 「ダイキくん!!」  
ダイキくん 「リホちゃん」  
リホちゃん 「ダイキくん……そこにいるの？」  
ダイキくん 「ああ。いるよ」  
リホちゃん 「ごめんね、ごめんね、ごめんね」  
ダイキくん 「ううん。謝らないで」  
リホちゃん 「わたし、本当にきみを思い出したいの。なのに、どうしてか、  
どうしてなのか、本当に思い出せなくて」  
ダイキくん 「ううん」  
リホちゃん 「色々、お世話になったんだよね、迷惑かけたんだよね、支えて  
もらったんだよね」  
ダイキくん 「ううん」  
リホちゃん 「それなのに、一つも思い出せないの……ごめんなさい」  
ダイキくん 「リホちゃんが、障害を克服したからだよ」  
リホちゃん 「ノートにはこんななにいっぱいきみのことが出てくるのに」  
ダイキくん 「リホちゃん、ぼく、もう帰らなくちゃ」  
リホちゃん 「ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさい」  
ダイキくん 「リホちゃん、謝らないで」  
リホちゃん 「もうお別れなんだよね。お別れ」  
ダイキくん 「……」  
リホちゃん 「ごめんなさいでお別れするのは、嫌だよね」  
ダイキくん 「え」  
リホちゃん 「ごめんなさいは、悲しい」  
ダイキくん 「リホちゃん……」  
リホちゃん 「だからね。ありがとうって」  
ダイキくん 「リホちゃん……」  
リホちゃん 「ありがとう」  
ダイキくん 「……」  
リホちゃん 「今まで、ありがとう。わたしを支えてくれて、ありがとう」  
ダイキくん 「覚えててくれたんだね」  
リホちゃん 「見捨てないでくれて、ありがとう」  
ダイキくん 「うん」  
リホちゃん 「励ましてくれて、ありがとう」  
ダイキくん 「うん」



リホちゃん 「傍にいてくれて、ありがとう」

ダイキくん 「うん」

リホちゃん 「友達になつてくれてありがとう」

ダイキくん 「うん、うん」

リホちゃん 「好きでいてくれて、ありがとう」

ダイキくん 「うん、うん」

リホちゃん 「お別れを言いに来てくれて、ありがとう」

ダイキくん 「うん、うん」

リホちゃん 「わたしはもう、ダイキくんのこととは見えなくなつてしまつたけれど……それでも、あなたのこと、絶対に思い出すから」

ダイキくん 「リホちゃん、もう切つたら」

リホちゃん 「わたしはわがままで、腕もすぐ切つちやうくらい弱かつたけど」

ダイキくん 「切りたくなつたら、ノートに書いて」

リホちゃん 「ダイキくんがいたから、ダイキくんが傍にいたから」

ダイキくん 「先生とも、おねえちゃんとも、たつくんとも、笑つて暮らして」

リホちゃん 「強くなれたの。ちゃんと、強くなれたんだよ」

ダイキくん 「ごめんなさいじゃなくて」

リホちゃん 「あなたに恩返ししたいのに、いっぱいしてもらつたのに何もできなくて」

ダイキくん 「ありがとうって言えるように」

リホちゃん 「だからわたし、一生懸命生きるよ！」

ダイキくん 「いつも笑つて楽しく生きられるように」

リホちゃん 「みんなと笑つて、楽しく。ダイキくんにまた会つたときに『わたし、強くなつたでしょ』ってちゃんとと言えるように、強く生きるからさ」

ダイキくん 「リホちゃん」

リホちゃん 「だからさ、安心して、安心して、いいんだよ」

ダイキくん 「うん、うん」

リホちゃん 「ダイキくん。ありがとう」

ダイキくん 「リホちゃん。ありがとう。じゃあ、ね」

新田先生 「ありがとう、ありがとう」

リホちゃん 「先生」

ダイキくん 「リホちゃんを、これからもよろしくお願いします。リホちゃん、元気だね」

リホちゃん 「さようなら、さようなら」

ダイキくん、ハケる。

リホちゃん 「きつと、きつと思いつから！ あなたのこと、きつと、きつと思いつから！」

リホちゃん 「ダイキくん……？」

新田先生 「ダイキくん……」

リホちゃん 「ダイキくん？」

新田先生 「いない」

たつくん 「あ！ また動いた」

キホちゃん 「元気な赤ちゃんですnee」

リホちゃん、キホちゃんの方へ歩き出す。

キホちゃん 「元気に生まれてきてよお」

たつくん 「(リホに気づいて) リホちゃん」

リホちゃん、無言でキホちゃんに抱き着いて泣く。

キホちゃん 「ちよつとリホ、どうしたのよ」

リホちゃん、泣いている。

たつくん 「リホちゃん」

キホちゃん 「どうしたのよ、リホ」

L、暗転

終わり